パネルディスカッション・ブレイクアウトディスカッション

ラムザン・ミルザ
阪　本　真由美
李　　仁　子
内　田　晴　子
小　山　真　紀
司会　王　　柳　蘭

王　ありがとうございました。ではこれからパネルディスカッションに移ります。これまでに質問やチャットでコメントをいただいています。その一つとしてチャットの中には「培われた多様性という視点をコロナ禍において、例えば災害においてリーダー層がどのように意識しているか。どのように災害に生かすことができるか」というコメントがありました。

では、いまからパネリストにこちらで用意したキーワードをもとに順番に話をうかがいたいと思います。キーワードは、「多文化の暮らしをすることと災害時に多文化な人たちとつながること」、「『いつも』と『もしも』をつなぐこと」です。具体的にはセーフティネットを誰と、どんなふうにつくっていくことができるか。誰が担い手になることができるか。そのシステムはどういうものがありうるか。セーフティネットの構築が縦割りであることで起こる問題とは。外国人と日本人の壁とか、同じ宗教でもバングラデシュの人もいればインドネシアの人もい

て、コロナ禍においてマスクをつける、つけないといった問題や、多様性がある一方で人々が縦社会の中で分断されていること。阪本先生からご提案があったように、セーフティネットが災害時には、例えば交通の足も絶たれてしまうという点をふまえて、ハードとソフトのセーフティネットに関してどうつなげるのがよいか。こうした点について、それでは、まずラムザンさん、モスクの役割を災害においてどう考えているかについていかがでしょうか。

ラムザン　イスラム教や他の宗教でもそうだと思いますが、昔のアダムとイブの時代からガイドラインがある。人々はモスクや教会へいって礼拝に参加して、神さまから「何をしたら良い、何をしたら悪いのか」ということについてガイドラインを習う。それを日常生活で使う。モスクや教会で習って日常生活に生かす。こうした教えから習ったことをきちんと理解し、うまく日常生活で使ってくれたら一番いいと思っています。それがモスクの役割です。

王　モスクの役割で大切なことはクルアーンに基づいてさまざまな実践を日常に生かしていくことですね。ありがとうございます。つぎに李先生にお願いします。セーフティネットのことについて「いつも」と「もしも」をつなぐ仕組みについてはどうでしょうか。

李　東日本大震災の被災を受けた方々を調査とかフィールドワークをすると、あまりにも置かれた状況がさまざまで、行政の訓練とか、日頃考えられる範囲での準備は確かなセーフティネッ

トになるかもしれないですが、大震災で被災された一般住民の方々に話をうかがうと「まず自分の命をちゃんと守ること」を切に主張されます。いかに置かれた状況の中で目一杯、みんなが想像して行動できるか。自分の身近なところにいる人たちとどうやって危険を打破していくかが基本的な考え方なのかなと思います。訓練をやる時は切羽詰まった環境をつくろうとしても、なかなかできない。いくつかに分けて、どのくらいのレベルの災害なのかを想像しながら、それに沿った訓練や日頃のセーフティネットを考えないといけないと思います。石巻の大川小学校のある大川地区で10年間調査していますが、大川では小学校の子どもたちだけでなく、地域住民も半数が亡くなっています。そういう経験をした人たちがいうには「防災グッズもいらない。それがあるために命とりになる可能性もある。用意することさえ贅沢で用意したものがあるととりにいって命とりになる可能性もある。何より大事なのは自分も含めて命が大事だ」と。日頃のマニュアルも大事ですが、それにあてはまらない状況の中で、いかに想像力をかき立て、自分以外の人は何がわかっているか、何に困っているかを、その場で確認することがセーフティネットになるのではないかと、今日の私の発表からは申し上げたいと思いました。

王　命がらがらの時、防災グッズにとらわれすぎて逃げるのもどうかという話でもありますね。では阪本先生お願いします。

阪本　日常的によく利用している場所、日頃のつながりは災害時にも頼りになるのではないかと思います。学校、職場、教会、

モスク、普段行くところが災害時にどうなるのかを確認しておく必要があると思います。学校は耐震化が努力義務化されていますが、モスクや教会のような宗教施設の耐震強化を努力義務化するという動きがあるわけではないので、施設を利用する場合、災害時に強い場所になっているかどうかは調べておく必要があると思います。そういう取り組みを進める上では日本人側からの積極的な取り組みも必要だと思います。日本には外国の方がたくさんいますが、そのことを見ないふりをする、行政も積極的に外国人への対応を働きかけない、地域の人も知っているにもかかわらず、避難訓練に声かけをしていない側面もあるので、もっと積極的に日頃からつながりをつくることを、みんなで心がけていく必要があると思います。

王　「身近なところで、どのように」ということですね。信頼関係をつくり、日常から防災につなげるということですね。では内田先生お願いします

内田　「身近なところで」というのはそのとおりですね。個人的に町内会が機能しているところに住んでいるのですが、結婚して住み始めた時は地域の運動会などの行事に、忙しい、余裕ない、面倒だなと感じていました。徐々に慣らされていって、ある時期から自覚的に「もし災害があった時、この人たちの顔を知っておかないといけない」と意識するようになりました。過去に起こった大きな災害があり、自分がたまたま生き残っているから、そう思えるんですね。ただ、日々、面倒くさいわけですよ。けれども、そういう日々の、無駄、厄介と思えるような

ことも、ご高齢の方とのやりとりもすべて「大事なこと」と思いながらやっています。見た目が外国人で話しかけにくいなと感じたり、マナーを知らないと感じられたり、言葉が通じないから面倒だなと感じたりする人についても同じです。めんどくさいと思いながらも、しかしその人たちと、どこかでかかわっていかないといけないと思います。私自身は自分にとって心地よい外国人コミュニティがあるので、そこにいり浸ってしまいますが、そこだけに安住していてはいけないなと。〇〇人のコミュニティ、〇〇人を支援するグループとか、縦割り、グループ分けになっちゃうといけないなと深く反省しました。

王　ありがとうございます。では小山先生お願いします。

小山　外国人に限らず、つながっていないところをつなげようとすると、しんどいんですよ。声かけといっても負担にならない人もいれば、清水の舞台から飛び下りるくらいの気持ちじゃないと、「おはよう」といえない人もいて。最初のつながりとしては、つながっている人を介してつながることがいいと思います。今回の「日常」と「防災」をつなぐということでいうと、外国人支援をしている団体、グループ、集まりとか、日本語教室とか、いろんなチャンネルがある。そこで地域で防災をやっているグループがつながる。防災活動のグループも増えています。社会福祉協議会は災害ボランティアセンターを設置していたり、日常から災害を見越したつながりづくりに取り組み始めています。「日常」のつながっているところと「災害時」を考えている人たちが、まずつながる。そこにネットワークが生ま

れる。防災をやっているグループ、活動をしている人たちは自治会の人も多いので地域のつながりにつながる。ちょっとずつ無理のない形で広げていくのがいいと思います。外国人だけではなく、福祉もそうです。いきなり高齢者の家にコンコンといっても、「あんた、誰よ」という反応されます。それでは縁はつながらない。普段からつながっている民生委員がつなぐことで「この人、怪しくないよ」となるとつながりやすい。一番難しい人は孤立している人で、孤立していると足がかりがない。見守りのような形で訪問していく取り組みも福祉でされていますので福祉と防災と、外国人も含めて、いろんなチャンネルをつなげていくことが効果的ではないかと思います。

王　今日の発表のなかでもチャンネルの多様性がたくさん出てきました。人の多様性のみではなく、チャンネルの多様性についても大事です。では最後になりましたが、ブレイクアウトをしたいと思います。身近な外国人にはどういう人たちがいるかを想像し、その人たちが、災害が起こった時、どうなるか、私たちはどんなつながりができそうかという場面を自分の中で想像していただいて、みなさんで話していただきたいと思います。

【ブレイクアウト 10 分】　ブレイクアウトの個別内容については省略します。

王　ありがとうございました。引きつづき、チャットに感想を自由にお書きください。では、出村さんがグラフィックレコーディングをもとにお話しされます。よろしくお願いいたします。

出村　今日のタイトルが「多文化な日常における防災－『いつも』

と『もしも』をつなぐ」です。ご参加いただけなかった方に今日の話を伝える時、ぜひグラフィックレコーディングをご活用いただければと思います。最後のパネルディスカッションのところでは、講演者の声を反映させて書いています。今日の講演会のキーワードをいくつかあげています。「日頃のつながり、身近なところから」であったり、「日本人から、外国人に対して日頃から積極的に働きかけませんか」、「正直、日々面倒くさいと思うけれども、ご近所の人を知ったり、かかわっていくことは大事ですよね」など、大切なことを言葉にしてくださいました。「マニュアルも大事だが、いかに想像力を引き出すか」といったことであったり、「つながっていないところをつなげるのは大変だけど、つながっている人を介してつながる。まずはつながっている人からつながっていく」などです。具体的なネクストステップ、自分でも「できそうだな」という時間を過ごさせていただきました。みなさんも今日の話を誰かに伝えたり、また振り返りをしていただければと思います。

王　アートセンスもバッチリですね。出村さんとアートでつながってよかったなと思います。本日は「多文化な日常における防災－『いつも』と『もしも』をつなぐ」、みなさんにご参加いただきありがとうございました。防災というと「もしも」という発想が多いのですが、私たちの企画は「いつも」というところを起点に多文化を交差させて、「もしも」の時にどうやってつなぐことができるかをポイントにして議論してきました。これからもみなさんと横のつながりを広げて、課題を展開して

いければと思います。

今日はお忙しい中、3時間にわたりご参加いただきありがとうございました。オンライン上でのつながり、バーチャルでつながることができてよかったなと思います。今後もまた違うつながり方を模索できるのではないかと期待しています。

【グラレコ：パネルディスカッション】